

I-10 白幡化学

(1) 研究仮説

現在の教育には、主体的・対話的で深い学びを実現することが求められている。グループ学習をメインにしたアクティブラーニング型授業を実践することにより、この学びを実現し、思考力、表現力、知識の活用力、課題解決能力を高めることができるであろう。

(2) 実践

ア 対象 第2学年 理系 (A組 37名, B組 39名, C組 42名, D組 41名)

イ 単位数 5単位 (週あたり5時間, 年間175回) (C組は4単位)

ウ 指導方法

通常の講義中心の授業の他に、以下の2手法のアクティブラーニング型授業を取り入れた。

(ア) グループワークを取り入れたアクティブラーニング型授業

4名程度のグループを作り問題演習を行う。グループ内で互いに教え合いながら課題を解決する。全員が課題を解決できるようになることを目標として取り組ませる。

(イ) ジグソー法を取り入れたアクティブラーニング型授業

4名程度のグループを作り、グループ毎に割り当てられた問題を解き、模範解答を作成してメンバー全員が理解する。次に、各問題グループから1名ずつ入るようにグループを組み替え、そのグループ内で自分の担当した問題の解答・解説を行なう。

エ 教材

(1) 「化学基礎」(実教出版)

(2) 「化学」(実教出版)

(3) 「サイエンスビュー 化学総合資料」(実教出版)

(3) 評価

(ア) 自力では課題を解決できない生徒も、グループ内の他のメンバーに質問しながら課題を解決することができていた。単に解答を写すのではなく、意味を理解しながら解答できていた。また、教える側の生徒も、解答方法を自分が理解できるだけでなく他の生徒に教え理解できるように説明を工夫することで、その分野における理解がさらに深まっていた。この取り組みによって、普段の学習も意欲的に取り組むようになり、授業でもよく質問するようになった生徒が増えた。

(イ) 生徒は担当した問題を他の生徒に説明できるようにならなければいけないので、難しい課題であっても積極的に取り組み、協力して課題を解決しようとする姿が見られた。また、(ア)では教わる側だった生徒も、こちらでは教える側となり、他の生徒が理解できるよう説明ができるよう努力をしていた。

どちらの方法でも、生徒同士で教え合わせることで活発な対話が生まれ、教員が教える以上に主体的で深い学びが実現された。

I-11 白幡生物

(1) 研究仮説

- ア 協働して学ぶことで、学習意欲が高まるであろう。
- イ 協働して学ぶことで、知的好奇心が高まるであろう。
- ウ 協働して学ぶことで、学習内容の理解が深まるであろう。
- エ 協働して学ぶことで、科学の楽しさが増すであろう。

(2) 実践

- ア 対象生徒
第2学年C組（生物選択者 11 名）、D組（42 名）

- イ 単位数
3単位（週あたり3時間、年間105回）

- ウ 実施方法
協働的な学習活動として、教科書を中心とした10分以内の教員の解説の後、生徒同士で会話する時間を設ける。学んだ内容を自分なりにまとめなおして相手に伝えたり、疑問に思ったことや理解が難しいところを相手に聞いたりする。その後、理解できた人は挙手するように指示し、挙手しなかった生徒に分からなかったことなどを発表してもらう。その質問に答えることで理解を深めていく。なお、挙手には責任を持つこと、今分からないことを明確にしてクラスで共有することはとても意義があることを、年度当初に繰り返し伝えた結果、今では不明点があれば積極的に手を挙げない雰囲気ができている。

また、積極的な会話を促すため、各クラスの席配置を次のようにする。

- ・2年C組：ゼミ（大学の少人数ゼミのように教員含め全員の顔が見えるように席を配置）
- ・2年D組：ペアワーク（隣の席のクラスメイトと席を寄せ2人1組）

(3) 評価

下に仮説を検証するための生徒アンケート（平成30年1月31日実施 49名(欠席3名)）の結果を示す。

	質問：ペアワークやゼミ形式では 一斉授業と比べて	そう思う	やや そう思う	あまり 思わない	思わない
仮説ア	受け身でなく参加できた	33	15	1	0
	時間が経つのが早く感じた	14	27	8	0
	自分の頭を使って考えた	34	15	0	0
	やる気になった	21	19	7	2
仮説イ	もっと知りたいと思った	18	22	9	0
仮説ウ	内容がよく分かった	26	21	1	1
	思考が深まった	27	20	2	0
	多様な視点から考えることができた	21	19	9	0
仮説エ	生物の楽しさを感じた	30	14	5	0

仮説については、表のデータから概ね実証できたと考える。また、自由記述欄には仮説アについて「話し合いの時間に向けて理解しようという気持ちになるのでより集中できる」「眠くならないので助かっている（同内容5名）」といった記述や、仮説ウについて「ノートをとることが中心の授業より内容を理解しやすかった」「話すことで考えが深まった」「わからないところもすぐ確認できて、集中できる」「友達や先生に質問しやすく、理解が深くなった」といった記述が見られた。

一方、比較的「思わない」「あまり思わない」が多かった質問については、その質問が仮説を検証するのに本当に適していたかを考え直すとともにそう考えた理由についての調査が必要だと感じた。また、「ペアワークは良くも悪くもペアになる人で大きく変わる」といった声もあり、質の向上に向けてより工夫をする必要があると感じた。

I-12 白幡英語 I

(1) 研究仮説

ALT とのティームティーチングを行うことで、英語を通して、事実や意見などを多様な観点から考察し、相手や目的に応じた表現方法を工夫しながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことができるだろう。また、論理の展開や表現の方法を工夫しながら、情報や自分の考えなどを的確に伝える英語表現力も高まるだろう。

(2) 実践

ア 対象生徒： 第1学年全クラス

イ 単位数： 1単位（週あたり1時間 年間35回）

ウ 指導方法

(ア) ALT とのティームティーチングを行い、前期はスピーチの基礎を築くことを目標とし、後期は前期の学習内容を土台にし、ディベートの基礎を構築する。

(イ) クラス間の指導が均一になるように年間指導を作成する。

エ 教材

独自作成のワークシート

オ 内容

(ア) Show & Tell (生徒が一人ずつスピーチを行い、同時に他の生徒のスピーチを評価する。)

(イ) Problem-solution Speech (グループごとに問題の解決方法を話し合い発表する。)

(ウ) Presentation (JICA ボランティアの方に日本の紹介をプレゼンで行う。)

(エ) 1 分間スピーチ (『文理選択』をテーマに、自分は文系理系のどちらを選択し、またその理由をまとめてクラスでスピーチする。)

(オ) Camping ゲーム (授業の始めなどに warming-up として、物の共通性をつかんでいくゲームを行う。)

(3) 評価

「白幡英語 I の授業を振り返って」という内容で1月下旬にアンケートを実施した。

ア 参加生徒の感想（一部抜粋）

(ア) 授業を通して達成できたこと

- ・プレゼンの作り方や技術が向上した。
- ・伝えたいことを相手に分かるように上手く表現すること。文法の使い方。
- ・スピーチでは、練習を何度もして英文を覚え、発表では自分の言葉で前を見て伝えることができたと思う。
- ・できるだけ自分が知っている英語だけを使って指定された文字数の文章を書くことができるようになった。
- ・スピーチ自体が苦手だったので、回数をこなすことで少しでも苦手をなくすことができたと思う。
- ・恥ずかしがらずに、間違ってもいいから“とにかく話す”ことの大切さを知った。

(イ) 授業内容についての感想

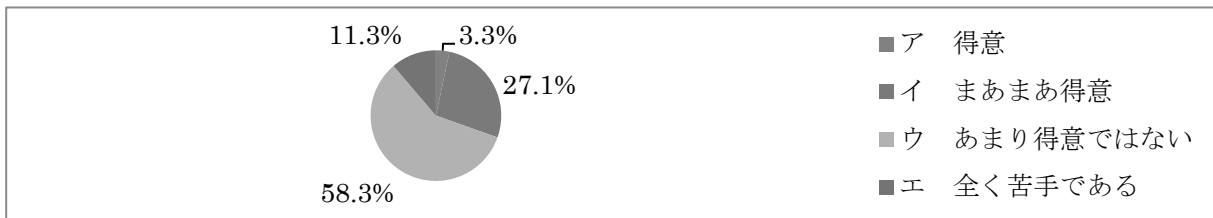
- ・英語に親しみを持てるようになり、進んで英語を話したり、勉強したいと思うようになった。
- ・ある程度英語が分からないとつらい。しかし、面白い。
- ・自分の目標でもある「英語で話す」授業が中心なので、考える作業が少し大変だが、やる度に達成感を味わえる授業で、楽しい。
- ・これからは人前で発表することが多くなると思うので、自分の意見を発表することは大切。
- ・いろいろな活動で、間違えるのを心配して日本語を話してしまうことがあったので、もっと積極的に英語を話したいと思った。
- ・原稿等が何もない状態で話すのが難しかったのですが、伝えようという気持ちは前より増し

たと感じられた。

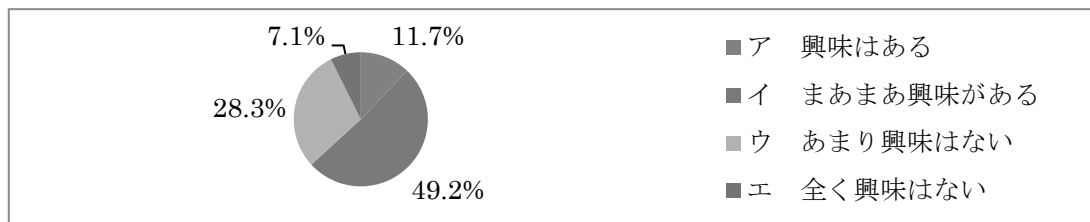
- ・難しく嫌いだけど、慣れていかないとだめだと思った。
- ・英語でプレゼンテーションをするのが難しかった。だけど、班の皆と協力することで英語の力を深めることができた。

イ 集計結果

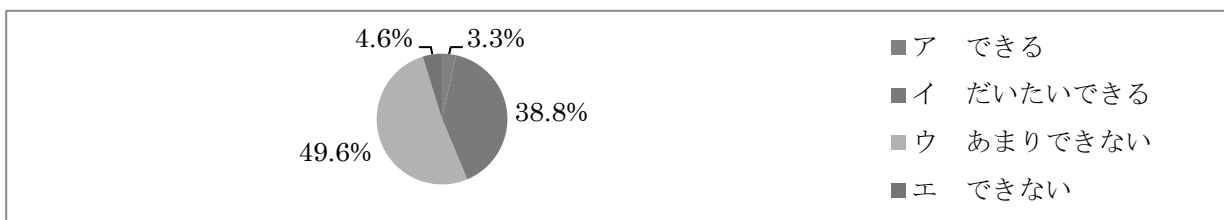
(ア) [ペアやグループの中で英語を話すことは得意ですか？]



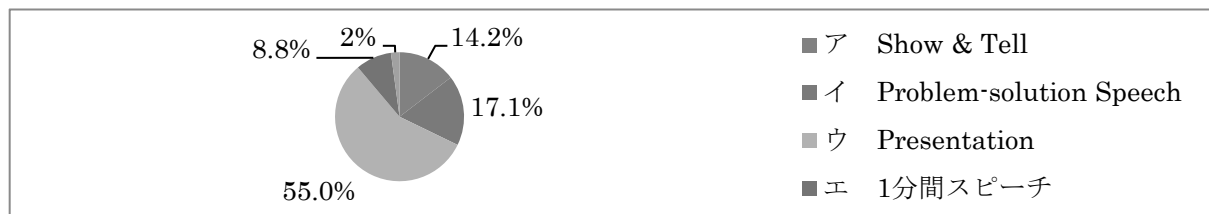
(イ) [ペアやグループの中で英語を話すことに興味はありますか？]



(ウ) [トピックに対して英語で自分の主張を適切な理由や事例を添えて話すことができますか？]



(エ) [授業内容で積極的に取り組めたものはどれですか？]



ウ 生徒のアンケート分析と今後の課題

アンケートの結果から、『ペアやグループの中で英語を話すこと』について、「まあまあ得意」・「得意」と答えた生徒が全体の3割であったに対し、『(英語を話すことに)興味はあるか』という質問については「興味はある」・「まあまあ興味はある」と答えた生徒が合わせて6割以上を占めている。さらに「生徒の感想」からも分かるように、たとえ苦手であっても、自分の考えなどを英語で伝えることの必要性を感じている生徒が多く見られる。これらの結果から、得意不得意に関わらず、英語で話すことに対する生徒の興味・関心が全体として高いとわかる。一方、『トピックに対して英語で自分の主張を適切な理由や事例を添えて話すことができるか』という質問には4割以上の生徒が「できる」と答えている。「コミュニケーション英語Ⅰ」や「英語表現Ⅰ」では読解力の土台となる英単語や構文・文法を学習するが、「白幡英語Ⅰ」の授業では、英語で表現する力をつけさせるのを目標としている。今後は、これまで学んできた内容をさらに発展させ、英語表現の駆使について練習を重ねることで「できるようになった」と思える生徒が増えることを期待したい。

I-13 白幡英語II

(1) 研究仮説

1年生で実施してきた白幡英語Iを継承し、ALTとディベート活動等の英語活動を継続して行うことで、事実や意見などを多様な観点から考察し、英語での表現方法を工夫しながら、論理的に自分の考えを的確に伝える力がさらに高まるだろう。また、ディベート活動を通しての仲間との協働が、学習意欲や知的好奇心を高め、チャレンジ精神やリーダーシップを育むことにも寄与するだろう。

(2) 実践

ア 対象 第2学年 全クラス

イ 実施方法及び内容

週に1時間、ALTとのチームティーチングで実施した。ウォームアップとして毎回ALTが提示したテーマについて“1 minute speech”をペアで行い、用意されたテーマに関してパートナーが何語話したかを数え、記録した。その後に“Nanchatte Debate”と称する、マンツーマンのディベート活動を行った。“Cats are better pets than dogs”（ペットとしてネコの方が犬よりも優れている）や“The Dokodemo-door is better than the Takekoputa”（どこでもドアの方がタケコプターよりもよい）のような簡単な論題から始め、“Japan should spend more money to support for foreigners living in the country.”（日本は日本在住の外国人のためにもっとお金を使うべきだ）など、より難しいテーマにもチャレンジした。この活動では、生徒たちは毎回ワークシートを使い、提示された論題に対し、賛成・反対それぞれの立場で自分の考えをまとめ相手に伝え、相手の考えを書きとめ、さらにそれに対して反論を考え、メモし相手に伝えるということを行った。

夏休み以降はALTが代わったこともあり、それまでの流れを少し変えて、自分の主張を口頭で伝えるという活動に加え、ワークシートを用い、エッセイにまとめるという練習も行った。それを毎回ALTがチェックし、生徒が共通して犯す文法上のミスなどを次の授業時にフィードバックした。また、12月以降は文系のクラスでEnglish Communication IIの授業とコラボし、チーム対チームでのディベートを行った。論題はThe Japanese government should place restrictions on the way young people can use social media.”（日本政府は若者のソーシャルメディアの使用の仕方に制限を加えるべきだ）とした。

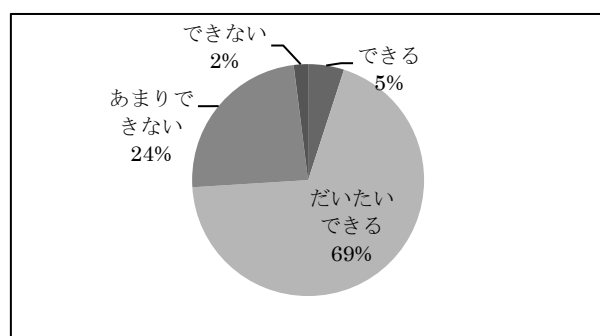
(3) 評価

1年次よりテキストとして使用した『はじめてのディベート』（エスエイディーワークス社）のCan-doリストに基づいて、2年生の12月にアンケートを行った結果が以下の通りである。

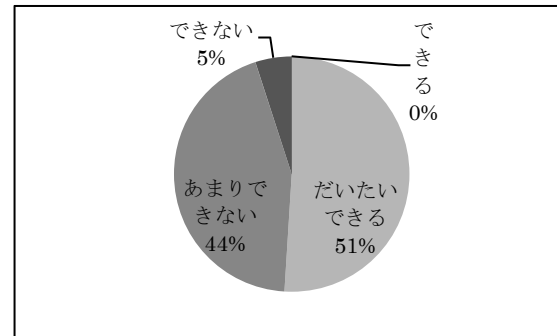
ア 集計結果

ディベートの授業の授業を通じて

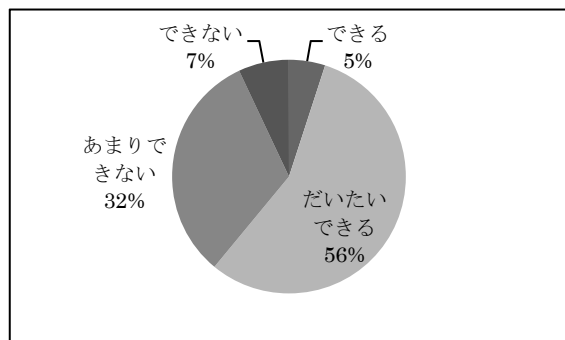
①相手の英語での意見を適切に理解できる



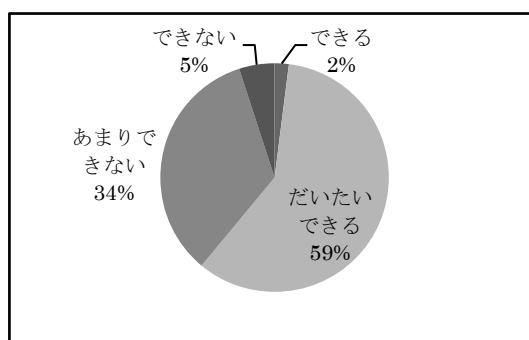
②自分の意見を分かりやすく伝達できる



③相手と自分の意見の確からしさを
根拠の強さから比較できる。



④相手の意見に対して簡潔に反論を行える。



⑤ディベートの授業で得られたことは

- ・自分で表現したいことを分かる言葉で伝えられるように、たくさんの言葉を調べるようになった。
- ・英語を話すことが前よりも簡単にできるようになり、表現の幅が広がった。
- ・自分で意見を考え、英語の文にする力がついた。
- ・様々な視点から考えることができるようになった。
- ・自分がどれだけ英語を話すのが苦手なのかが分かった。
- ・瞬時に自分が思ったことを英語にすることができるようになった。
- ・リスニング力がついた。
- ・常に英語で思考する力がついた。
- ・根拠のある意見を言えるようになった。

⑥ディベートの授業でもっと学びたいことまたは困ったこと

- ・知っている単語が少ないと感じ、もっと勉強しようと思った。
- ・自分の意見を英語でまとめることができない。
- ・すぐに頭に浮かんだ文章を英語にできない。
- ・英語を正しく聞き取れない、流暢に発音・伝達ができない。
- ・ボキャブラリーが少ないので、決まったことしか言えなかった。
- ・分からないまま授業が進んでしまうことがある。
- ・もっと身近な（簡単な）テーマでディベートをやってみたい。
- ・うまく英語で伝えられるようになりたい。

イ 分析と今後の課題

ディベート活動を行う中で、自分の知らない表現を辞書で調べたり、ALTに積極的に質問するなど意欲的に取り組む姿が多く見られるようになった。さらにディベートのチーム内で協力して考えて発表するという一方で、お互いに助け合い高めあう様子が多くみられた。

アンケートの結果から見て、相手の言っていることは6割強の生徒が理解できているのに対して（グラフ①の「できる」＋「だいたいできる」）、「自分の意見を分かりやすく伝達できる」という質問に関しては53%の生徒ができると答えている（グラフ②の「できる」＋「ほぼできる」）。自分の意見を英語にして伝えることに難しさを感じている生徒がまだまだ多いようである。質問⑥から見ても、「英語で意見を述べるのに必要なボキャブラリーや表現をもっと身につけたい」と感じている意見が多く見られる。今後のディベート活動では、そういった表現や言葉をまず先にできるだけ多くインプットしてから始めるのが適切であろう。

また論理的に考え、反論することに関しても半数近くの生徒が「あまりできない」または「できない」と答えている。（グラフ③④）今後の対策として、身近な生徒の答えやすそうなテーマから繰り返し論理的に **Constructive speech** を作ったり、**Defense** をしたりすることから始めることが必要だと思われる。

II-1 英語プレゼンテーション講座

(1) 研究仮説

本校スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業の目標の1つでもある「グローバル社会で世界の人々と協働するためのコミュニケーション能力および発信力を身につける」ため、英語のプレゼンテーションの専門家に様々な知識やノウハウを直接ご教授いただくことにより、わかり易く英語で他者に説明する能力を取得することができるであろう。

(2) 実践

[第1回目]

- ア 実践日時 平成29年5月11日（木）第5・6時限目
イ 実施場所 本校飛龍館2F 多目的室
ウ 講師 ヴィアヘラー 幸代 氏（有限会社インスパイア副代表）
エ 参加生徒 2年C組（SSクラス）の生徒42名
オ 実施内容

Learn To Present science for Ryugasaki 1st High School という演題でご講義いただいた。1回目では Orientation & Impromptu Presentation-3topics というテーマで、① Walk & Talk ② Eye Contact ③ Gesture がプレゼンテーションにおいていかに重要であるかを教えていただいた。その後実際に生徒達が実践する場面もあり、生徒たちは戸惑いながらも、先生のアドバイスに従ってプレゼンテーションの訓練を行った。

[第2回目]

- ア 実施日時 平成29年11月16日（木）第5・6時限目
イ 実施場所 本校飛龍館2F 多目的室
ウ 講師 ヴィアヘラー 幸代 氏（有限会社インスパイア代表）
エ 参加生徒 2年C組（SSクラス）の生徒42名
オ 実施内容

今回は前回と同じ演題の2回目ということで、How to Tactfully Handle Q & A をテーマに指導を受けた。プレゼンテーションを行った後の質疑応答の対処の仕方について教えていただいた後、生徒達全員が実際にペアで自分たちの Opinion を発表し、それについての質疑応答を行った。

(3) 評価

ア 参加生徒の感想（アンケートより）

- ・「Mistake is good.」間違えることは怖いけれど、この言葉を聞いてもう少し積極的になるうかと思えた。
- ・相手の目を見て、自分が何を伝えたいのかを明確にして、相手に伝えたいと思いながら話すことが大切だと思いました。

イ 考察

生徒たちは英語でのプレゼンテーションに対する苦手意識を持っているが、2回の講義を通してほぼ全員の生徒がとても良かった、勇気をもったという感想を述べている。この2回の講座が大変効果のあるものであったと確信する。

II-2 イングリッシュ・キャンプ・イン・オーストラリア

(1) 研究仮説

本校スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業の目標の1つでもある「グローバル社会で世界の人々と協働するためのコミュニケーション能力および発信力を身につける」ため、オーストラリアで英語研修を行うことにより、異文化理解を深め、世界共通語である英語での発言力を伸ばすことができるであろう。

(2) 実践

ア 対象

本校2学年生徒 23名

イ 実施日・場所

平成29年8月8日（火）～21日（月）

オーストラリア・クイーンズランド州ブリスベン市 ファーニー・グローブ高校
(26 McGinn Rd, Ferny Grove QLD 4055 Australia)

ウ 実施内容

事前研修を11回実施し、英会話や現地での生活についてや帰国後の報告書作成に向けての準備を行った。ファーニー・グローブ高校では現地英語講師を迎えて午前中は英語トレーニング、午後は現地校のバディの授業に参加した。さらにクッキングや体育の授業にも参加した。英語の授業では宿題としてホストファミリーや友人にインタビューをし、その結果を英語でプレゼンテーションをする形式で行われた。ローンパイン・コアラ保護区へのバスツアーにも参加し、ホストファミリー宅でのホームステイを通して異文化生活を経験した。

引率教員 中島陽子、井川裕司

(3) 評価

ア アンケート結果

	5:大満足	4:満足	3:普通	2:やや不満	1:不満	平均
1. 事前学習に関して						
①全体を通して	3	13	6	1	0	3.78
②最終案内に関して	3	13	6	1	0	3.78
2. ホームステイについて						
①ホームステイの感想	14	5	1	3	0	4.30
②ファミリーへの土産	一例)箸、皿、扇子やうちわ、風呂敷、手ぬぐい、浴衣、折り紙 など					
③ホストファミリーの人数(省略)						
④家族以外の同居人	あり:4名(中国からの留学生3名、ドイツからの留学生1名)					
⑤ステイ先の食事	9	14	0	0	0	4.39
3. プログラムの内容について						
①英会話レッスンについて	7	14	2	0	0	4.22
②現地授業体験について	8	10	4	1	0	4.09
③バディについて	13	7	3	0	0	4.43
④ローンパイン遠足について	9	13	1	0	0	4.35
⑤日本文化紹介について	6	9	7	1	0	3.87
⑥フェアウェルパーティについて	4	16	2	1	0	4.00
⑦現地コーディネーターについて	8	12	3	0	0	4.22

イ 考察

アンケート結果より、生徒からの研修の評価は概ね高い評価を得ている。また今回はバディとの現地授業についても満足度が高かった。

(4) 今後の課題

第2回夏期海外研修も無事終わることができた。全体的に過密なスケジュールであったので、次年度以降はもう少しゆとりがある企画を考えたい。

II-3 英語 de サイエンス

(1) 研究仮説

理科教員の協力のもと、本校 ALT に英語で科学実験を指導してもらうことで、将来世界で活躍できるたくましい科学者にむけ、素晴らしい動機付けとなるだろう。

(2) 実践

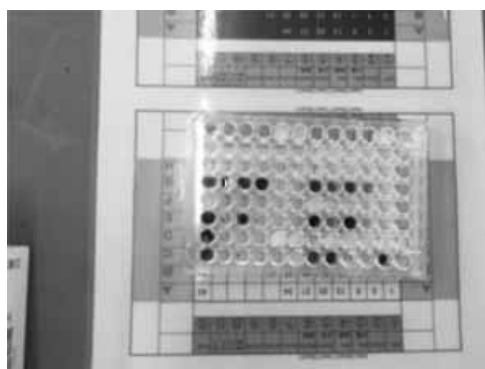
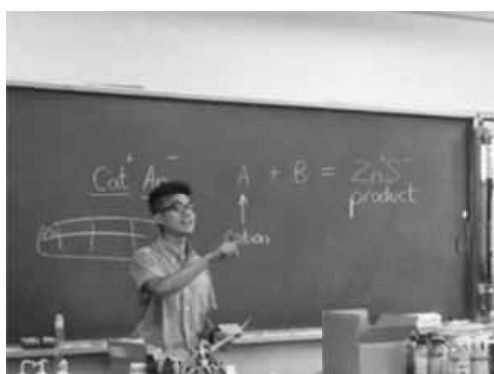
ア 実施日時：平成 29 年 7 月 12 日（水）第 2・3 時限目

イ 実施場所：化学室

ウ 参加生徒：3 年 G 組（SS クラス）

エ 実施内容

マイクロスケール版の陽イオン系統分析（廃液も少なくエコフレンドリーな実験でもある）。



(3) 評価

ア 参加生徒の感想（一部抜粋）

○授業が進むにつれて、だんだん慣れて英語を聞き取ることができたので嬉しかった。大学では授業で英語を使う機会ももっと増えると思うのでこの経験を活かしていきたい。

○思っていたよりは、日本語でやる時とそれほど変わらず先生の指示や説明を理解することができたと思う。大学でも研究と英語は益々密接に関わってくるので、これからもっと英語に積極的に慣れておくことが重要であると痛感した。

イ 今後の課題

理系専攻の ALT が配属になった場合は今回のように比較的スムーズに実験が進められる。一方で文系専攻である ALT が配属になると、この企画自体が難しく、外部に協力をお願いすることになってしまい、その場合は単発の実験や講義となり、授業とのつながりが持ちにくくなってしまっているのが欠点であろう。ALT が理系の場合、これまで ALT 自身に実施してみたい実験を聞いて、授業の進度に合わせて時期を選んで実施していたが（2 月実施で報告書に間に合わなかった年もある）、今回のように、あらかじめ理科教員の方で行う実験を決めておき、それを ALT に英語で実施してもらう方が、はるかに準備が楽であった。今後は ALT をお願いする実験を理科の方で 2, 3 個あらかじめ決めておき、毎年その同じ実験を英語科が補助しながら ALT に年数回英語で実施してもらうというスタイルを検討していきたい。

II-4 レインボー国際交流

(1) 研究仮説

世界が急激に変化していく中、これからの社会を担っていく高校生に、日本に留まらず世界へと視野を広く持ってほしい。そのため、JICA 研修生の方々と交流をすることによって、生徒たちが世界の現状と課題についての理解を深め、国際協力の必要性について考えることができるであろう。

(2) 実践

ア 対象

本校 1 学年生徒 279 名

イ 日時・場所

日時 平成 20 年 2 月 14 日 (水) 13:30~15:30

場所 本校 1 年 A~G 教室 (7 会場)

ウ 実施内容

- ① JICA 研修生 13 名 [10 カ国 (インド, スリランカ, タンザニア, パキスタン, バングラデシュ, フィジー, フィリピン, ブラジル, ベトナム, ネパール)] による自国のプレゼンテーション
- ② 本校生徒による日本文化のプレゼンテーション
- ③ 研修生と本校生徒による交流

エ 事前指導

白幡英語 I の授業で以下のような準備を行った。

- ① 英語でのプレゼンテーションの進め方や, PowerPoint スライド作成上の注意点を英語で学ぶ。
- ② 5 人グループに分かれ, 各グループごとに決めた日本に関するテーマについてインターネットや書籍を利用して調べる。
- ③ 英語の発表原稿と PowerPoint スライドを作成する。
- ④ クラスごとに授業内でそれぞれのグループがプレゼンテーションを行い, 評価の高かった 4 グループを選ぶ。
- ⑤ JICA 研修生の出身国についての概要を読み, 質問してみたいことを英語でまとめる。

オ 当日の活動

各教室に教員を配置したが, 生徒が主体となり, 以下のように活動を進めた。

- ① 各クラスの国際交流委員が JICA の研修生 2 名を教室に誘導する。
 - ② 委員が司会進行を務め, 研修生の紹介をする。
 - ③ 本校生徒の 2 グループ 10 名が, 自分たちで決めた日本に関するテーマについて PowerPoint を用いながら英語で発表し, 研修生からの質問に答える。
 - ④ JICA の研修生 1 名が出身国の地理や歴史, 文化, 宗教, 生活について紹介し, 生徒は事前に用意しておいた質問や, 発表を聞き思いついた質問をする。
- 休憩をはさみ, 上記②~④の活動を本校生徒の残りの 2 グループともう 1 名の JICA 研修生について同様に行う。
- ⑤ 本校生徒から謝辞を述べ, 記念品贈呈, 記念写真撮影を行う。

カ 当日の活動の様子

本校生徒は, 日本の四季や生活習慣, 和食・和菓子, 伝統芸能・祭, 漢字・ひらがな, 漫画やアニメなどを高校生の視点から紹介し, 研修生は熱心に耳を傾けてくれた。JICA 研修生からは, 普段高校生が気に留めないような点についての質問もあり, 生徒は返答に詰まる場面もあったが, 発表の担当ではない生徒たちも積極的に参加していた。自分たちとは異なる視点からの質問で, 日本について改めて考える機会を持つことができたようだ。

JICA の研修生によるプレゼンテーションでは, 各々の国の文化や料理, 歴史, 地理, 宗教, 生活習慣などについて熱心に話してくださった。普段の授業で耳にしている英語の発音, 本校 ALT の発音とは異なる発音であったため, 英語だけで理解するのは難しかったようだった。しかし写真や動画も用いたパワーポイント資料を準備してくれていたため, 興

味深い発表であった。質疑応答の時間は、あらかじめ準備しておいた質問だけでなく、プレゼンテーションを聞く中で思いついて質問も出され、充実した時間となった。

また、休み時間中に多くの生徒が積極的に JICA の研修生と会話をし、交流を深めることができていた。

キ 事後指導

生徒たちがメモを取った記録用紙と、事後に記入させた感想文を提出させた。担任や英語科教員で目を通し、気づいたことを生徒たちに還元した。

(3) 生徒感想(抜粋)

- ・ あまり自分の馴染みのない国のことを知れたのはとても新鮮でした。国ごとに食べ物や文化・祭り・宗教などが違うことを知ることのできた良い機会だったと思いました。意外と自分が知っていると思い込んでいる国でも、実は知らないことが多いということに気付くきっかけとなりました。
- ・ 日本の文化について調べていくことで、改めて日本の素晴らしい部分を認識することができた。また、研修員の方々の話を直接聞くことで、世界各国の価値観や考え方の違いを実感することができた。
- ・ 普段インターネットなどのメディアを通して僕たちが見ている世界は、ほんの一部に過ぎないと感じた。視野を広げて物事を見たり考えたりすることがとても重要で、そのような前向きの姿勢を大切にしたい。
- ・ 英語で発表することばかりに意識が向いてしまいがちだったが、聞いてくれている人たちの反応を見ながら声の大きさや話す速さを変えたり、スライドを送るタイミングを工夫することも、相手に理解してもらうには大切だと思った。
- ・ 今回の交流活動で、自分の英語力の無さを痛感した。話したいのに話せないこと、話を聞きたいのに何を言っているのか分からないことにショックを受けた。英語の授業に一生懸命取り組むのはもちろん、自分がこれまでおろそかにしてきた Speaking や Listening にも頑張って取り組んでいきたい。

(4) 評価

多くの生徒が事前の準備・練習から当日の発表・進行まで熱心に取り組んできた。一連の活動の中で、自身の英語力や日本文化についての知識、異文化理解について改めて考えることができたと思われる。

英語を用いてコミュニケーションができたという生徒がいる一方、今まで慣れ親しんだ発音とは違っていたこともあり、思うようにできなかった生徒もいる。そのいずれにとっても今回の活動はもっと英語を使えるようになりたいという強い動機付けになったようだ。

研修生の出身国は、多くの生徒にとってあまり馴染みのない国で、生活習慣や文化は日本と異なる部分が多く、生徒たちは興味を持って耳を傾けていた。自分たちの思い描いている異文化というものが一部の先進諸国のものであり、いかに偏っているかを実感したようだ。グローバル化する社会では広い視野を持つことが必要だということを理解でき、有意義な活動となった。

今回の国際交流活動を通して、異文化理解や英語によるコミュニケーション活動などに対する生徒の意識に大きな変容をもたらすことができた。生徒にとってより一層強い動機付けになるよう、次年度以降も工夫を重ね継続していきたい。

